

PGSを参考にした

埼玉県小川町の参加型認証への取り組み

参加型認証に取り組む小川町住民有志（50音順）

金子宗郎 かねこむねお 霜里農場 さとうし 日本有機農業研究会会員

泉地春香 せんちはるか 地域おこし協力隊 たけのり 株式会社 風の丘ファーム

八田さと子 はった NPO法人霜里学校

本稿では、小川町の農業全体を視野に入れた参加型認証の試行的取り組みについて報告する。この仕組みの名前は未定だが、この活動の出発点は日有研やIFOAMが発表してきたPGSに関する資料であり、その考えに基づく活動であるため、PGSと表記する。

小川町の有機農業と地域認証

小川町は中山間地域であり、少量多品目栽培を行う有機農家が多い。また、小川町の有機農業の源流を築いた故・金子美登さんが、消費者と直接つながり信頼関係を築く「提携（産消提携）」活動を重視していたことから、現在も消費者との顔の見える関係を大切にしている。

一方で、近年は有機農家の経営スタイルも多様化しており、提携活動に加え、スーパーや直売所、専門流通などが重要な販路となっている。

日本で有機農産物と表記するには有機JASの取得が必須である。しかしながら、費用や事務の手間を考えると、小規模家族経営が大半の小川町の農家にはハードルが高い。また、有機JASは、禁止事項を定めた認証制度だが、地域の自然との関りや資源の循環、農家と消費者間の支え合い、地産地消など、ポジティブな面はまったく評価しない。

小川町の有機農家は、伝統的にこのポジティブな面を入れて農業をしてきた。その相入れなさからも、有機JASを取得し続ける農家は皆無だった。

一方、地域の自然との関りや資源の循環への貢献という点は小川町の慣行農家にも共通する。小川町独自の取り組み「おがわんプロジェクト」は、地元の農業を応援する仕組みとして2017年にスタートした。土づくりへのこだわりや努力を、農家自らが宣言し、その取り組みを町が認証している。認証は2種類で、環境保全型循環農業である有機農業の取組を宣言をした「おがわんネイチャー」と、小川町らしい農家のこだわりや地域への貢献、美しい里山づくりなどへの取組を宣言した「おがわんナンバー1」がある。

また、ネイチャー、ナンバー1それぞれにBIOの区分がある。BIOは、町が指定する土壌微生物多様性・活性値の検査を行い、その数値が100万を超えた農家が受けられる。町内の農家、農産物を「おがわんブランド」として見える化し、農家を応援する輪を広げること、地域活性を目指している。おがわん農産物は、JA直売所に特設販売コーナーがあるほか、学校給食でも優先的に使用されている。

小川町の「有機農業の認証」に関わる課題

先の文からもわかるように小川町の有機農家にとって

- ・有機JASは取得しない／経営規模や信念に合わない。
- ・おがわんは町内では通用するが、町外（顔が見えない関係や距離）では有機JASには遠く及ばない。

では「小川町らしい有機農業の認証の形とは何か？」という問いからPGSとの出会いと旅が始まった。

PGSの試行に関わったメンバーのコメント

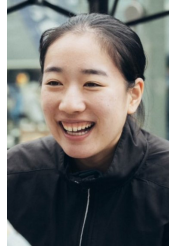
なぜ小川町でPGSの検討が始まったのでしょうか？

金子きつかけは、2021年頃に読んだ『土と健康』のPGSの記事です。PGSは、小川町の有機農家が長年大切に育んできた農家と消費者、さらには地場の食品加工産業を含めた「顔と顔の見える関係」を深化させる取り組みだと理解しています。



小川町の有機農業は「無農薬・無化学肥料栽培」だけに定義されず、踏み込み温床に象徴される里山と畑の循環だったり、槻川^{つぎかわ}の恵みが田んぼを潤したり、豊かな自然を守り、守られて成立するもの。そのような日々の農業の積み重ねも評価できるような仕組みづくりが理想だと考えています。

私たちがPGSに取り組むその原点は、シンプルに胸を張って「有機農産物」であると謳うこと。有機JASに学ぶべき点は学び、「有機」慣行の二項対立を乗り越えるための視点として、日本の有機農業運動が大切に育んできた地域資源の循環と自給、たとえば、地産地消やフードマイレージといった概念まで評価できるような、認証の新たな枠組みを「おがわん」と二人三脚で築き上げたいと考えています。



泉地 小川町には「おがわん認証」という地域認証がありますが、再考が必要だと思って、ここ2年活動してきました。その理由は、「おがわんネイチャー」は有機JASの基準と同等の栽培を行っている農家が宣言できますが、認証後の圃場検査などをしていないので、宣言後の栽培状況を証明できない。

認証制度の信用性という点で不安があります。また、一定規模の農家やグループは大手専門流通やスーパーに出荷しています。取引先から有機であることの証明が求められる。「おがわん」が、その際に役に立つ仕組みでありたいとも思っています。現状はそうなっていない。

小川町でのPGSに関する活動について教えてください。

八田 2022年の有機農業フォーラムで小川町の農家さんも私もPGSの存在を知り、その後、オーガニック雫石を視察。そのころ「みどりの食料システム戦略」に関する事業に町として取り組むことになり、その一部の事業としてPGSの検討が始まりました。

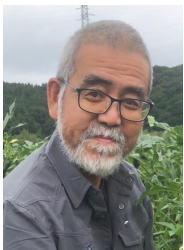


「圃場見学会等を通じた継続的な相互理解と勉強の場づくり」がPGSの要ですから、まずはその実践に向けて、勉強会から始めました。勉強会や審査方法の検討会などに農家、行政、製造業者、消費者、JASの検査員などさまざまな立場の方が集まってくれました。それは農家さんと地域の産業、消費者、そして行政が連携している証でもあり、ありがたかったです。

評価指標である栽培原則はIFOAMの認定団体である、オーガニック雫石のものを、許可をいただき参考にさせていただきました。さらに評価基準の検討には有機JASの知識も必要であると考え、コーディネート^{コーディネーター}の泉地、八田は有機農業生産工程管理者の資格も取得しました。PGSを取り入れた圃場見学会（審査会）は2段階に分けて行いました。1回目は有機JAS検査員など専門知識のある方をお招きした

少人数の事前審査会。2回目は学校給食センター、JA、消費者、農商工連携をしている酒造会社、豆腐屋さんなどと交流をメインにした圃場見学会です。2年間で延べ61名が参加しました。いずれも農家さんの栽培記録や圃場の情報、農業歴、工夫やこだわりなどを資料にまとめ共有しました。

これまで4つの農家や農業法人で栽培管理アプリも活用してデータ作成し、圃場見学会を行いました。圃場見学会／審査会をした時のエピソードを教えてください。



田下 PGSの圃場見学会がきっかけで教育委員会からおがわ学（*）のコーディネーターのN先生がうちの畑に来てくれた。土の感触がすごく良かったというから微生物の話をしたんです。土中の微生物などの生き物によって、ふかふかの土になる。土壌微生物の発育を促進することで、病原菌や細菌が蔓延しにくくなるし、特定の虫の大発生を防ぐとかっていう話をしたら非常に興味を持ってくれたんです。ぜひこの情報をおがわ学の教科

書に盛り込みたいと。

八田 圃場見学後の意見交換でのエピソードです。学校給食センター長が、全国オーガニック給食フォーラム2024（常陸大宮市開催）で配布された資料から「オーガニック給食実施自治体アンケート結果」を共有してくださった。

小川町は、「学校給食に有機野菜を導入している自治体」として導入率（重量ベース）が51自治体中2位（17%）。1位は白杵市（23%）という内容。一同驚いたのですが、この発言を皮切りに意見交換が進み、「1位を獲得するには？」という議論に発展しました。

PGS活動がオーガニック給食の実現を目的とするわけではないですが、多様な立場の方が参加したことで、新たな交流や連携による地域の課題解決、目標達成の一助となることは証明できたように思います。

＊おがわ学：小川町独自の地元学。小中高の授業で町の自然や歴史、文化、産業などを体験も交えて学ぶ。有機農業はその科目の一つ。地域の実践者もゲストティーチャーとして伝え、共に考える。児童・生徒が主体的に学び、課題を見つけて、解決のアクションまでを行う。

小川町における参加型認証のこれから

田下 PGSでつながった縁として学校給食がありますが、新規就農者の販売先として、学校給食を位置付けられたらと思っています。出荷先が近いのは非常に良くて、それに一番は地元の子どものためというところ。直近はそれを実現するために、動いていこうと思っています。佐藤 小川町におけるPGSの動きの特徴であり、心強い点は町長を代表とする小川町有機農業推進協議会が行っていること、つまり行政も



大きく関わっている点です。PGSが引き続き、学校給食や小川学に良い影響を与え、連携を深める機能になる可能性は高いんじゃないでしょうか。

八田 冒頭に金子さんがおっしゃったように、

「有機」と「慣行」の二項対立にならない仕組みを検討して役場に提案しています。それはおがわん認証自体を参加型で行うことです。その過程で、栽培管理情報はもちろん、個々の農家の想いや取り組みを整理して公開する仕組みは欠かせません。

泉地 おがわん認証制度の中で情報公開、定期更新である程度おがわん認証のエビデンスが示せますね。それに、慣行・有機の垣根を越えた交流と理解の促進になります。

金子 担い手が減っている農業だからこそ有機と慣行の垣根を越えた「つながり」の中で地域の農業を維持発展させていく必要があると思うんです。その潤滑油的機能が「PGS」にはある。われわれは有機農業の証明としてPGSにチャレンジしたけれど、「参加型」の可能性は「証明」という枠にとどまらないことを実感しました。

呼び方はどうあれ、まさにこの活動は「地域を耕す」岩手県栗石町の先達者に教えられた道標です。

※圃場見学会の様子は、報告ウェブサイトを参照されたい。



BOOK



プラスチックの逆襲

とけだす有害物質が
少子化の原因に!?

水野玲子 著

高文研 / 2025年1月

本体 1800円＋税

2050年には世界の海で魚よりプラスチックの重量が多くなると言われています。大気も同様で、先頃富士山山頂でもプラスチック反応がありました。そして、プラスチックにはあまり知られていない重大問題があるのです。溶けだす有害物質、その中でもとくに内分泌攪乱化学物質によって、私たちの生殖機能、免疫、神経系への打撃の科学的立証報告がなされています。

加工し易く便利なプラスチックの出現からわずか100年で、世界は環境含め徐々に終焉へと進んでいます。

今からでも遅くない。プラスチックの逆襲に向かい自分と家族の健康を守る道を示します！